

英語での発信力を養うための プレゼンテーションスキル向上の取り組み ——インプットからアウトプットへ——

Enhancement of English Presentation Skills to Foster Communicative Competence

——From Input to Output——

山科 美智子

YAMASHINA Michiko

Abstract : An adequate command of spoken English — the international common language — is a critical language skill, and language teachers must be able to effectively reinforce oral communication competency. In an EFL environment like Japan, scaffolding speaking competency is not easy: learners do not have many opportunities to speak English outside the classroom, and they are sometimes afraid to speak English in front of other people. In my university class, I use various speaking activities to reduce fear of speaking and improve operational skills. I also assign a presentation as the culmination of the speaking exercises. In this paper, I compare the results of the first presentation with those of the second presentation, and analyze the effects of the speaking activities.

Keywords : presentation, output, speaking, communicative competence, active learning

1. はじめに

グローバル化が進む社会において、国際共通語としての英語の運用能力を高め、発信力を強化していくことは、これからの英語教育において急務となる。一方、日常生活において英語を話す機会が非常に限定されているEFL環境の日本において、スピーキング力を高めていく取り組みは

容易ではない。学生は、人前で英語を話すことに関して抵抗感がある場合も多く、英語4技能の中で、スピーキングに対する心の障壁が一番高い傾向がある。その心の障壁を取り除き、統語的な言語処理能力を高め、コミュニケーション力を強化していくためにはどのようなアクティビティーが有効であろうか？ 本研究においては、通年のスピーキングクラスでの様々なスピーキング力向上のための取り組みに言及するとともに、集大成としてのプレゼンテーションにおいて、学生の英語での発信力がどのように向上したかを分析し考察していく。

2. 背景

2.1 インプット仮説とアウトプット仮説

第二言語習得はどのようになされるのか？ 習得のメカニズムに関して、様々な仮説が立てられ論じられてきた。1970年代後半から1980年代にかけて、Stephan Krashenは5つの第二言語習得に関する仮説を提唱し、語学教育界に大きな影響力を及ぼした。その5つの仮説とは、Input hypothesis (インプット仮説)、Acquisition-Learning hypothesis (習得学習仮説)、Monitor hypothesis (モニター仮説)、Natural Order hypothesis (自然習得順序仮説)、Affective Filter hypothesis (情意フィルター仮説)である。特にInput hypothesisは、5つの仮説の一つとされていたが、やがてこの5つの仮説全体を指すようになる。Input hypothesisとは、言語学習者が受ける理解可能なインプット (comprehensible input) のみが言語能力の向上に寄与する、という仮説である。Krashen (1985)¹はこう述べている。

Second languages are acquired by understanding messages, or by receiving 'comprehensive input'. 'Comprehensive input' is that bit of language that is heard/read and that is slightly ahead of a learner's current state of grammatical knowledge.

Krashenによると、言語学習者は、現在のレベルよりわずかに高いレベルの言語インプットを理解した時に言語レベルを向上させることができるとして、これを「 $i+1$ 」と呼んでいる。 i が現在の言語レベル、 $+1$ は次のレベルとの差異を表す。Krashenは、インプットと対照的に、アウトプット(発話)は言語習得の「結果」であり、言語の「習得」に直接寄与することはないと主張した。従って、彼は、言語教育においてアウトプットは低く抑え、生徒は準備ができるま

で話すことを強要されてはならないと論じている。

一方、Swain (1985) は、カナダのイマージョン・プログラムの子供たちが、目標言語のインプットを大量に長期的に受けたにも関わらず、言語能力が期待されたほど伸びなかったことから、理解可能なインプットに加え、アウトプットが言語習得に関して大きな役割を果たすという Output hypothesis (アウトプット仮説) を提唱した。Swain (1985)²⁾はこう述べている。

The output hypothesis claims that the act of producing language (speaking or writing) constitutes under certain circumstances, part of the process of second language learning.

Swainによると、第2言語習得におけるアウトプットの役割は3つある。(1) Noticing function、(2) Hypothesis-testing function、(3) Metalinguistic functionである。第一に、言語学習者は、アウトプットすることによって、「自分が言いたいこと」と「自分が言えること」の間にギャップがあることに気づき、それに注意を向けることになる。それが気づきの機能 (Noticing function) である。第二に、言語学習者はアウトプット時に自分で語彙知識、統語知識、音韻知識に基づいて、言いたいことの内容を表現できるよう「仮説」 (hypothesis) を立て、発話する。そして相手からのフィードバックをもとに 'trial and error' を繰り返す。これは、学習者が立てた中間言語仮説の妥当性を検証するもの (Hypothesis-testing function) とみなすことができる。第三に、アウトプットを行うことにより、学習者は言語の知識をコントロールし、内在化することができる。統語的な言語処理を自ら行うことができるのである (Metalinguistic function)。この統語的な言語処理は、意味処理が中心となるインプットでは経験することができないとSwainは述べている。KrashenのInput hypothesisはいまだに影響力を持つが、現代では、InputだけではなくOutputが第二言語習得において必須条件になるという考え方が主流になってきている。

2.2 日本の英語教育

アウトプットの重要性に関しては、近年までの日本の英語教育の結果からも導き出すことができる。鑑みるに、近年までの英語教育は明らかにインプットに偏っていた。中高の英語教育を例にとると、一般的な授業形態としては、教師はテキストの読解を教え、ボキャブラリーや文法事項を解説し、ドリルを行ってその定着を図る。リーディングやリスニングに特化した受験を乗り切るために、読む、聞くといった受信の能力は鍛えるが、話す、書くといった発信の能力はない

がしろにしてきた。その結果、中高少なくとも6年間の英語教育を受けても、日常会話さえもままならず、グローバル化するビジネスの場で充分対応できるだけの英語発信力が育っていないという批判を受けてきた。

米国のテスト作成機関であるETS(Educational Testing Service) が2014年1月から12月に行ったTOEFL テストのスコアランキング (TOEFL iBT Total and Section Score Means 1 - All Examinees, Classified by Geographic Region and Native Country) によると、日本人のTOEFL 平均スコアはアジア圏では36か国中33位、世界全体では、163か国中137位と最下層に位置している。各技能別に見ると、それぞれ30点満点中、リーディング18、リスニング17、スピーキング17、ライティング18で、どの技能もかろうじて50%を超える程度である。そして、他のアジアの国と比較すると、特にスピーキング (17点) とライティング (18点) の点数が低く、スピーキングは、アジア圏で最下位となっている。つまり、インプットに偏る教育では、英語の運用能力を養うことができず、かつ英語力全体の向上も限定的になってしまうことが判明しているのである。

こうした現状を打破し、グローバル化する社会のニーズに対応するため、文科省は、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し、2014年から随時英語教育改革を進めている。その改革には、小学校中学年からの英語教育の導入、コミュニケーション能力の育成、英語を英語で教える授業の推進、言語活動の高度化 (発表、討論、交渉等を含む)、4技能のバランスの良い育成、スピーキングやライティングの能力も計るための入試における外部検定試験の活用等が含まれている。全体的に、アウトプットとコミュニケーション力育成に主眼を置いた内容となっている。

この英語教育改革をふまえたうえで、現在の大学生の英語運用力の現状はどうだろうか？ 現大学生は、旧来の講義型、あるいは受験準備型の英語教育を受けてきた学生が多い。英語は好きだが、英語を話すことは苦手な学生や、英語を読むことは問題ないが、自分で英語を話すとなると、言葉が出てこない、という学生も多い。日本で英語を学習する場合、たとえ文科省の指導要領にのっとり英語で行われる授業やアクティブラーニング型の授業が増えたとしても、一歩クラスを出ると、英語を話してコミュニケーションをとるという環境にはない場合が多く、英語を話す機会は限定されている。そのため、いざ英語を話すとなると、緊張してしまったり、臆してしまうという学生が多い。また必要以上に間違えることを恐れ、文法や発音を気にするため、余計に話せなくなるという学生も多い。

こうした現状を踏まえ、まず英語で話すことに対する心の障壁を取り除きながら、様々なスピーキングアクティビティーを通じてアウトプットを繰り返し、英語運用力を鍛え、その集大成

として5分間のプレゼンテーションをするというカリキュラムを実施してきた。以下はその概要と効果の分析である。最初に6種類のスピーキングアクティビティーに関して記述し、次に集大成としてのプレゼンテーションの取り組みに関して分析していく。

3. スピーキングアクティビティーとプレゼンテーションの概要と目的

3.1 対象者

スピーキングの授業を受講する関東在住の女子大学生25人。春学期、秋学期を通して、通年で受講している。

3.2 調査時期

2015年4月から2015年12月にかけて、授業内で後述の様々なスピーキングアクティビティーを行い、その集大成として、春学期末である7月と秋学期末である12月にプレゼンテーションを行った。

3.3 スピーキングアクティビティーとプレゼンテーションの目的

スピーキングアクティビティーの目的は下記の5項目である。

- ① 英語で話すことへの心の障壁を取り除く
- ② 伝えたいことを表現できる英語運用能力を高めていく
- ③ 声の大きさ、アイコンタクト、表情、ジェスチャーを含めた「伝える力」を磨く
- ④ 日本語の発音と英語の発音の違いを認識し、よりネイティブライクな発音に近づけていく
- ⑤ 人に伝えるための論理的な思考力を身につける

上記の5つの目的は、プレゼンテーションはもちろんだが、英語でコミュニケーションをとるうえで欠かせないスキルを養うことを主眼にしている。

まず、①「英語で話すことへの心の障壁を取り除く」ことであるが、これは前述したKrashenの5つの仮説の中のひとつ、Affective Filter hypothesis（情意フィルター仮説）でも唱えられている。Krashenは、恐怖や当惑、困惑などのネガティブな感情は学習者の言語習得能力を低下させると主張している。スピーキングが苦手な学生にとっても、できるだけプレッシャーがかからない方法で発話を促し、英語を話すことが楽しいというポジティブな感情を抱かせるようにすることが目的である。

②「伝えたいことを表現できる英語運用能力を高めていく」に関しては、まず、コミュニケーションをスムーズに行うための英語運用能力の養成に力を入れていく。英語教育のゴールは、ネイティブと同等の英語力を身につけることではなく、国際共通語としての英語をツールとして使いこなし、コミュニケーションをとり、意見交換、討論、交渉などを進めていける能力を養うことである。Swainが主張したように、アウトプットの中で、trial and error を繰り返しながら、「相手に伝わる英語」を習得していくことが重要である。

③「声の大きさ、アイコンタクト、表情、ジェスチャーを含めた「伝える力」を磨く」に関しては、英語自体だけでなく、他の要素もコミュニケーションに重要な役割を果たすことを学び実践することが目的となる。特にプレゼンテーションでは、上記の要素が重要になってくる。また、日本人に比べ表情やジェスチャーが豊かな欧米の人の話す態度をまねることもコミュニケーション能力向上の一助となる。

④「日本語の発音と英語の発音の違いを認識し、よりネイティブライクな発音に近づけていく」に関しては、2つの相反する認識が背景にある。まず②でも述べたように、英語教育のゴールは、ネイティブのような発音で完璧に話すことではない。発音を意識しすぎると、余計話せなくなってしまう傾向にある。しかし、伝わる英語を話すためにはやはりネイティブの発音を学び、近づけようとする努力が必要である。

⑤「人に伝えるための論理的な思考力を身につける」は、特にプレゼンテーションにおいて、内容を論理的なわかりやすい構成で伝えることが重要であるため、プレゼンテーションの組み立て方に関して学んでいく。

4. 各スピーキングアクティビティーの実施概要

授業内で行った6種類のアクティビティーの概要と効果を記す。それぞれのアクティビティーが前述のどの目的に匹敵しているかを示すため、()内に目的のナンバーを入れている。

4.1 ペアワークでのスキット練習 (① ②)

4.1.1 アクティビティーの概要

授業時間内に毎回ペアワークとしてスキットの練習をする。テキストのConversation Modelの

スキットを学んだあと、スキットの中の単語を次々入れ替えてペアでスキットをアレンジして練習することにより、会話の応用力を高めていく。

Conversation Model例（下線は変更する部分）

A: You look down. What's up?

B: Oh, nothing serious. I'm just tired of the same old grind. But thanks for asking.

A: I know what you mean. I'm tired of working, too. How about going to a movie? That always helps me.

B: Great idea. Let's go this afternoon!

ペアワークによるアレンジ例（下線は変更された部分）

A: You look tired. What's up?

B: Oh, nothing serious. I'm just tired of preparing for exams. But thanks for asking.

A: I know what you mean. I'm tired of studying, too. How about playing tennis? That always helps me.

B: Good idea. Let's go right now!

4.1.2 アクティビティーの効果

Conversation modelがあることで、まずは型どおり会話を練習し、そのあと、変えられる部分を自分たちが知っている単語を使ってどんどん入れ替えていくことで、バリエーションの幅を広げていくことができる。何もないところから自分で話す場合は、語彙不足のため発話に至らなかったり、不必要にプレッシャーがかかることがあるが、モデルがあると、まずそれを学び覚えることに専念し、そのあと部分的に語句を変えることにより、プレッシャーを感じることなく会話の応用練習に取り組んでいける。

4.2 グループワークでのスキット作成と発表 ① ② ③

4.2.1 アクティビティーの概要

テキストの各Unitの終了時に、そのUnitで習ったフレーズやボキャブラリーを使って、2、3人のグループでスキットを作り、それをクラスで演じる。人前での演技であるため、プレッ

シャーはかかるが、グループワークであることと、スキットの原稿が作成されていることで、人前で英語を話すことへの抵抗感は薄められる。スキットはテキストやビデオ教材等で学んだものを参考にしていいが、できるだけ自分たちのオリジナリティーを発揮して作成する方が好ましい。演じる時間は1グループ1分～2分とする。演じる際は、原稿を極力見ずに、役になりきり、アイコンタクトや表情に注意しながら演じることが求められる。グループ発表のあと、演技、内容ともによかったグループを投票により選ぶ。

4.2.2 アクティビティーの効果

テキストのUnitごとに学習したフレーズやボキャブラリーや文法事項を使用してスキットを作成するため、新たに得た語彙知識や統語知識を実際に運用してみることができる。スキットの原稿を作る際に、グループで文法やフレーズの使い方の間違いを指摘し修正することで、自ら学ぶアクティブラーニングによるより深い学びが得られる。

そして、発表の際、スキットの原稿を見ずに演じるためにセリフを暗記する必要があるため、英語表現の内在化が期待できる。それとともに、聞き手を意識してアイコンタクトを取り、表情やジェスチャーで感情や状況を伝えながら演じる必要性が出てくる。声の大きさも重要なファクターである。そうした、英語力以外での「伝える力」も身につけていく。発表後には、クラスのひとりひとりが、優れていたスキットとパフォーマンスに投票し、ベストパフォーマンス賞を選出するため、それがモチベーションとなり、グループでの練習も力が入る。

最初のうちは作成するスキットがテキストのものに酷似している傾向があったが、だんだん、オリジナリティーあふれるものが増えてきた。英語表現力が向上してきた結果であると推察する。学生からのアンケートによると、「最初はグループでスキットを作るのはめんどくさいと思ったが、だんだん楽しくなってきた、スキットを作って演じることが楽しみのになった」という感想や、「最初は人前で演じるのは恥ずかしかったが、何度かやるうちに、恥ずかしさや抵抗感がなくなって楽しくなった」という感想が多く聞かれた。人前で英語を話す抵抗感をなくす、という点においても効果的であると考察する。

4.3 プチプレゼンテーション ① ② ③

4.3.1 アクティビティーの概要

気軽に構えずにできる、1、2分のプチプレゼンテーションの機会を設ける。クラス全体に発

表する前に、4、5人のグループ内でお互いに発表しあい、準備をしてから発表にはいる。話しやすいトピックを選び、写真をビジュアルエイドとして使うことにより、発表のプレッシャーがあまりかからない状態でプレゼンテーションの練習をしていく。トピックは、休みに訪れた場所、行ったアクティビティー、自分が挑戦したこと、などである。

4.3.2 アクティビティーの効果

まず、クラスでの発表の前にグループ内で発表することにより、段階的に人前で話すプレッシャーを軽減していく。また、グループでお互いに感想を述べあうことにより、クラスでの発表の前にコメントやアドバイスを与えることができ、それを参考に修正を加えることにより、クラスでの発表の質を向上させることができる。そして、ビジュアルエイドとして、適切な写真を選んで使うことにより、言葉だけのプレゼンより内容が伝えやすくなる。

プレゼンテーションの際、話す内容を考え、スピーキングの練習をしていたとしても、実際にクラスの前に立ち皆の顔を見た途端、頭が真っ白になり、英語が出てこなくなったり、声が小さくなって、自分で何を話しているかわからなくなってしまうたり、という状況を経験するが、本番の前にプチプレゼンテーションを経験することにより心の準備ができて、緊張やストレスを軽減することができる。また、自分の伝えたいことを英語で表現する運用能力の訓練にもなる。

学生のアンケートによると、1、2分の発表でも緊張し、うまく伝えられなかった点があった、と課題を挙げる学生も多かった。また、アイコンタクトをとることや大きな声で発表することの難しさも認識したようである。その認識と反省点が次のプレゼンテーションに生かされていくと推察する。また、プレゼンテーションで、お互いについてシェアできることが楽しい、というコメントも多く、本番のプレゼンテーションに積極的に取り組むきっかけにもなっている。

4.4 プレゼンテーションの論理構成の確認 (⑤)

4.4.1 アクティビティーの概要

プレゼンテーションの論理構成は、基本的にエッセイを書く際の構成と同じであるため、エッセイを書く際の論理構成を復習しつつ、InformativeでありかつConvincingなプレゼンテーションになるよう、概要やドラフトを仕上げていく。途中でテーマから逸れたり、イントロダクションで述べた主張と結論が食い違ったりしないよう、非論理的な発表を避け、聴衆にとってわかりやすい論理的なプレゼンテーションを展開するために、下記の構成に従って、具体的な内容を各自

記入し、グループでお互いにチェックしあう。構成が曖昧だったり、一貫性がない場合は、そこを指摘して修正していく。また、ビジュアルエイドとして使うスライドも見直し、必要があれば構成がわかりやすいように変更を加える。

Introduction (Thesisの提示)

Body1 (Thesisをサポートする情報)

Body2 (Thesisをサポートする情報)

Body3 (Thesisをサポートする情報)

Conclusion (Thesisの再提示+情報のまとめ)

4.4.2 アクティビティの効果

自分が好きなことをテーマに選んでいるため、伝えたい情報が多すぎて取捨選択できず、全体の主張やテーマがはっきりしない学生も多いが、構成表に記入していくことで、いらぬ情報を削除してすっきりと伝えることができる。プレゼンテーションのスライド作成においても、ディテールに凝ってそこに夢中になるあまりに、全体の論旨からそれる内容の分量が多かったり、論旨に一貫性がなかったりする場合も多いが、そこを基本の構成に従って修正していくことにより、より論理的で分かりやすいプレゼンテーションに仕上がっていく。全体の構成がわかりやすいように、スライドにAgendaを加えたり目次を入れることにより、自分自身もプレゼンテーションがしやすくなった、という学生の声も聞かれる。

4.5 短いドラマシーンのシャドーイング (① ③ ④)

4.5.1 アクティビティの概要

学生がプレゼンテーションをする際一番陥りがちなのは、下を向いて原稿を読んでしまう事である。聞いている人とアイコンタクトもせず、小さな声で無表情に原稿を黙々と読んで終わってしまう。内容はよく吟味されておりテーマを裏付ける情報もしっかり調べているにも関わらず、最後のデリバリーの部分で自信のなさが出てしまう。毎学期、プレゼンテーションの評価表を集計していても、「アイコンタクト」や「声の大きさ」の項目の点数が一番低く、なかなか改善されないため、以下の試みを行ってみた。まず、2分ほどのドラマのシーンを見る。字幕は表示しない。内容に関する質問に答えることで、そのシーンの内容やセリフを確認していく。内容理解ができたところで、スクリーンに字幕を表示し、それを見ながら全員立ちあがって、表情やジェ

スチャーも真似ながらセリフをシャドーイングしていく。そのあと、ペアかグループで同じシーンのロールプレイをしていく。その際も表情やジェスチャーを真似ながらシャドーイングしていく。

4.5.2 アクティビティーの効果

英語圏の人は、日本人よりも話すときの表情が豊かでジェスチャーが大きい傾向がある。実際に真似てみると、それがよくわかる。全員が立ってジェスチャーをしながらシャドーイングすることにより、表情やしぐさも含め、ネイティブスピーカーの表現のし方や発音を学ぶことができる。立った方が声も大きく出すことができる。特定の学生を指名すると、恥ずかしさが先立ってうまくいかない場合が多いが、クラス全員と一緒にドラマをシャドーイングすることで、恥ずかしがらず演じる楽しさを体験できる。

学生のアンケートによると、実際に真似てみると、オーバーアクション気味でもちょうどいいのだということが分かった、というコメントや、俳優の表情が非常に豊かなので普段から英語を話すときも表情に気を付けたい、という気づきがあった。このアクティビティーを通して、英語だけでなく、表情やジェスチャー、そして声の大きさに注意が必要であることを自分の中に意識付けし、訓練していくことができる。

4.6 シャドーイングと録音による発音の確認 (④)

4.6.1 アクティビティーの概要

英語プレゼンテーションを行う際に、心の障壁となるもののひとつに、自分の英語の発音に対する自信のなさがあげられる。特に帰国子女や、留学経験のある学生がクラスにいて、彼らのネイティブのような発音を聞くと、劣等感を感じてしまうという学生も多い。

前述のように、発音に関しては、2つの相反する指導をしている。第一に、あまり発音にこだわりすぎない、ということである。アメリカに暮らしてみると、様々な国籍の人が英語を使ってコミュニケーションをとるため、様々なアクセントを耳にする。アクセントが強くても相手には通じていて、コミュニケーションには支障がない場合が多い。発音に劣等感を持つより、臆せず話し、伝えようとするの方が大切である。そのことをまず学生に伝える。

そして、第二に、そうはいつでも、発音は大切である、ということである。特に日本人特有の子音と母音をセットにしてすべての音を発音してしまう癖は認識して直していかないと、ネイ

タイプには通じにくくなってしまいます。そして、単語ひとつひとつを分けて発音するときと、文章として連続して発音するときは音が変わってくるため、その点も意識していかないと、リスニングにも影響が生じる。テキストによる発音事項の確認に加え、上記二点は強調して指導していく。そして、テキストのCDのスピードを遅めに調整し、発音を細かく確認しながらシャドーイングしていく。次に、自分の発話を録音し自ら聞くことで、細かい発音事項をチェックし直し、ネイティブとの違いを認識して修正していく。

4.6.2 アクティビティの効果

日本語と英語の発音の違いを認識してからシャドーイングしていくことで、違いにフォーカスすることができる。日本人は無意識にすべての音を子音+母音の組み合わせにしてしまうため、意識して訓練しないと修正しにくい。このアクティビティを何度か繰り返すことにより、正しい発音に近づけていく。

自分の声を録音することに関しては、自分の発音を聞いてショックだった、というコメントも多かった。自分の声自体が、録音して聞くと自分が思っている声と違うためショックを受ける傾向があるが、それに加えて、録音することにより、客観的に自分の英語の発音とネイティブの発音との差を認識できることはメリットである。

5. プレゼンテーションの取り組み

5.1 プレゼンテーションの概要

学期ごとのスピーキングアクティビティの集大成として、Informative and Convincing Presentationを行う。以下、概要である。

テーマ

- ・「自分が好きなこと、得意なこと、今一番関心があること」の中からひとつテーマを選ぶ。

時間

- ・ひとりの持ち時間は4分から5分とする。

条件

- ・テーマに関して自分の主張を提示し、その主張をサポートする客観的な情報を提供して、説得力のあるプレゼンテーションを展開する。

- ・ 英文資料を3つ以上読み、客観的な情報をわかりやすくまとめて伝える。
- ・ ビジュアルエイドを使うこと（パワーポイント、写真、動画、実演、実物を見せる、プリントを配るなど自由に考えてよい）

評価

- ・ Rubricに従ってクラス全員が評価者となり、すべてのプレゼンターの評価を行う。
- ・ 全員が自分のプレゼンテーションに対するクラスメイト全員からの評価やコメントを受け取る。Rubricの各項目の平均点を算出し、それを最終評価とする。

評価表

- ・ 評価表は下記である。内容、情報、説得力、ビジュアルエイド、声の大きさ、アイコンタクトに関して1～5まで点数をつけ、Total Scoreを出す。

Informative & Convincing Presentation評価表

Evaluation Points	Low					High
1. Was the content clear to you?	1	2	3	4	5	
2. Did she give you meaningful information?	1	2	3	4	5	
3. Was the presentation convincing to you?	1	2	3	4	5	
4. Did she use visual aids effectively?	1	2	3	4	5	
5. Was her voice loud enough?	1	2	3	4	5	
6. Did she make sufficient eye contact?	1	2	3	4	5	
7. Total Score						

5.2 プレゼンテーション実施の効果

すべてのスピーキングアクティビティの集大成としてプレゼンテーションを行うため、3.3の章に示した5項目の目標が達成されているかを、上記の評価表によって評価していく。この評価には、ビジュアルエイドの評価も含まれる。ひとりでクラスの前に立ち、5分間英語でプレゼンテーションを行うことは、ハードルが高いが、今までのアクティビティの成果を確認し、自分の発信力を試し、評価を得る貴重な機会となる。

プレゼンテーションに対する評価を、指導教員からだけでなくクラスメイトひとりひとりから得ることは、学生のモチベーションを上げるとともに、評価に客観性を持たせることになる。プレゼンテーションに対する印象は個々に違いがあり、また座る場所によって、声の大きさやアイコ

インタクトへの評価が異なるため、その平均値を算出することは公平さを保つうえで重要である。評価表の集計の結果、評価が低かった項目は、次のプレゼンテーションでの改善項目となる。

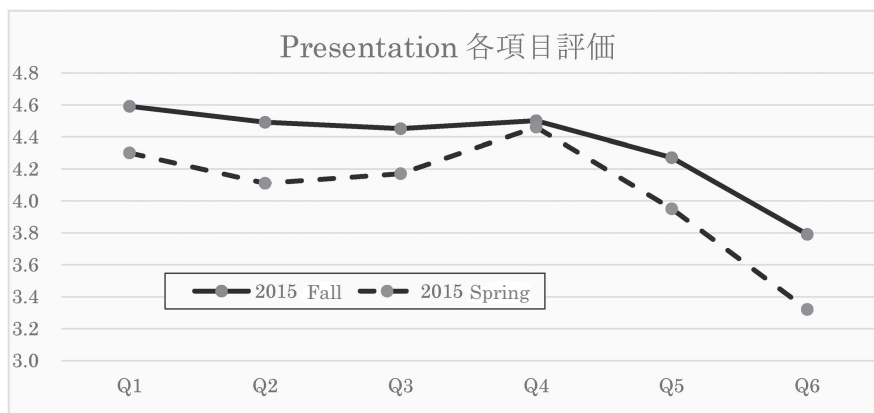
5.3 プレゼンテーション評価表の結果と分析

2015年春学期と秋学期のプレゼンテーションにおける評価表の各項目の平均値は以下の表の通りである。春学期と秋学期を比較し、差を算出した。

表1 プレゼンテーション評価表の各項目の平均値の比較

Evaluation Points	2015 Spring	2015 Fall	Difference
Q1. Was the content clear to you?	4.30	4.59	+0.29
Q2. Did she give you meaningful information?	4.11	4.49	+0.38
Q3. Was the presentation convincing to you?	4.17	4.45	+0.28
Q4. Did she use visual aids effectively?	4.46	4.50	+0.07
Q5. Was her voice loud enough?	3.95	4.27	+0.32
Q6. Did she make sufficient eye contact	3.32	3.79	+0.47
Total Score	24.15	26.0	+1.85

グラフ1 プレゼンテーション評価表の各項目の平均値の比較



5.4 考察

第1回目のプレゼンテーション（2015 Spring）より、第2回目のプレゼンテーション（2015 Fall）の方が、各項目で点数が上がっており、様々なスピーキングの取り組みの効果があつたと

考察できる。大きく分けると、Q1～Q3は内容や構成に関して、Q4はビジュアルエイド、Q5～Q6はアウトプットの仕方に対する評価となっている。Q1～Q4は、プレゼンテーションの事前準備によって評価が決まるが、Q5声の大きさ、Q6アイコンタクトは、当日のパフォーマンスによって評価が分かれる。春学期、秋学期を通じて、声の大きさとアイコンタクトの項目の平均点が低く、まだ、自信をもって5分間英語で話し続けられるだけのスキルは十分身につけてはいないと思われるが、春学期と秋学期の差に注目すると、秋学期は、Q5の声の大きさに関しては0.32ポイント、Q6のアイコンタクトに関しては0.47ポイント上昇しており、一番大きな進歩を見せている。これは、ペアワークやグループワークでスピーキングアクティビティーを繰り返し、アウトプットを強化してきた成果であるといえる。また、デリバリーのスキルは、Q1のわかりやすさや、Q3の説得力のスコアに直結しているため、すべての項目の平均値が上昇していることは評価に値する。

スピーキングアクティビティーの目的に掲げた5つの項目はいかに達成されたのであろうか？まず、①の英語で話すことへの心の障壁を取り除くことは、③の目的同様に、主にQ5、Q6に現れると推察される。英語を話すことに関して恐れがあると、緊張して声が小さくなったり、下を向いて原稿を読んでしまい、結果としてアイコンタクトが取れないからだ。人の前に立つと、母国語で話す場合も緊張するものであるが、それが英語となると自由にコントロールできる度合が下がるため、余計にストレスがかかる。それを声の大きさ0.32、アイコンタクト0.47ポイントであるがスコアが上昇したことは、成果とみなすことができる。目的②の英語の運用能力と④の発音は、Q1、Q2、Q3に主に表れてくる。Levelt (1989) のプロダクション・モデルに示されているように、言語産出の始点は、伝えるべきメッセージを持つことであり、そのメッセージの言語化を語彙知識が支え、さらに文法的、音韻的言語化、および調音化のプロセスを通じて相手に伝えられる。内容がはっきり伝わり、かつ情報が聞き手にとって意味のあるものでかつ説得力がある、というQ1～Q3の項目のポイントが上昇していることは、言語産出がより向上しているととらえることができる。目的⑤の論理的な思考力に関しては、主としてQ1とQ3に現れる。全体の構成力が内容のわかりやすさと説得力につながるからである。こちらもQ1が0.29ポイント、Q3が0.28ポイントと、わずかながら上昇している。

この検証に当たっては、プレゼンテーションのデータの比較が春学期末と秋学期末の2回しかないため、初期値のデータと比較することができない。つまり、春学期のスタート時にいきなりプレゼンテーションを行うことはできないため、春学期スタート時と春学期終了時のプレゼンスキルを比較することができないのである。比較できるのは、春学期末と秋学期末の評価値であり、

このスコアの差は、秋学期のスピーキングアクティビティーの成果を表していることになる。

実は、春学期の最初は、英語でプレゼンテーションをするなどということは不可能だと考える学生もいた。英語でのスピーチや発表の経験がなく、英語を話すということ自体に自信がないため、プレゼンテーションのアサインメントに難色を示す学生も多い。その状態から、全員がプレゼンテーションをやり遂げるところまで到達すること自体が、かなりの進歩であったということが出来る。そして、検証された数値は、第1回目のプレゼンテーションを達成した春学期から第2回目のプレゼンテーションを行った秋学期の上達の値であるため、数値自体は大きくないが、1年間を通じてのアウトプットスキルの向上という観点では、プレゼンテーションを2回全員が達成できたということ自体に重きを置きたい。

5.5 学生アンケートの結果

考察に加えて、秋学期のプレゼンテーションを終えた後学生が記入したアンケートの結果もまとめておきたい。準備段階で一番力を入れたこと、実際に発表しての感想、前期と後期のプレゼンテーションを比較してどうであったか、友人からの評価と自己評価の違い、秋学期プレゼンテーションの反省点、に関して質問をした。

準備段階で力を入れたこととしては、全体の構成とスライド作成を挙げる学生が多かった。全体の構成に関しては、伝えたい情報が多すぎて、何をメインに伝えればよいか取捨選択するのが大変だった様子が伺える。また、フォーカスしたメインアイデアをスライドにもはっきり示し、構成をわかりやすくする工夫をした学生も多かった。スライドに関しては、前期の反省を生かして、フォントを大きく、デザインをシンプルにして、見やすさを優先させた学生が多かった。グラフや図表を入れて客観的データを示すのはもちろん、動画を入れたり、アニメーションを付けたりして、わかりやすさやインパクトを重視する学生もいた。前期には、自分の話す説明をそのままスライドに書き込んでいる学生もいたが、そこは反省点として、文字は少なくして写真を大きく入れるよう意識した学生が多かった。

実際の発表に関しては、やはり前回同様、声の大きさとアイコンタクトが課題であった。練習を重ねて、原稿を見ずにアイコンタクトをとりながらクラス全体に聞こえる声で発表ができたという学生と、練習はしたが、前に立つと緊張して頭が真っ白になり、原稿に頼ってしまった、という学生の二手に分かれた。しかし総じて、十分ではないが、前回より改善されたと答えている学生が過半数を占めた。

友人の評価と自己評価の比較に関しては、思いのほか友人からの評価が高くうれしかったとい

う学生と、頑張ったわりに評価が低くてショックだったという学生に分かれた。後者の学生の「声の大きさ」の評価を見ると、総じて3以下であるため、聞き手は声が小さくて内容がよく聞き取れず、そのためQ1～Q3の評価も下がってしまったと考えられる。

反省点としては、やはりアイコンタクトを挙げる学生が多かった。前回よりもアイコンタクトを意識したが、十分ではなかったと感じている学生が70%近くいた。原稿から時々顔を上げて聞き手を見る程度だったり、クラスを全体的に見渡すことができず、一部の人としかアイコンタクトができなかったという反省点も多く挙げられていた。

全体としては、緊張はしたが、伝えたいことが伝わる喜びを感じた学生が多かった。4月にスピーキングクラスを始めるときは、まさかクラスの前に立ち、5分もひとりで英語プレゼンテーションをすることができるようになるとは思わなかった、という感想を書いている学生も数人いた。英語を話すことへの恐れや心の障壁を取り除き、伝える喜びを味わい、伝えたことに関する反応を得て、また修正していくというプロセスの中で、学生が英語での発信力を養い、プレゼンテーションスキルを向上させていく様子がアンケートからも伺える。

6. おわりに

日常的に英語を話す機会が少ないEFL環境においてスピーキング力向上を図るため、本研究では、目標を学期末の英語プレゼンテーション達成におき、授業内で6種類のスピーキングアクティビティーを行うことにより、その成果をプレゼンテーション評価によって検証した。設定した比較項目のすべてにおいて、秋学期末の結果が春学期末の結果を上回っていることで、ある一定の成果が認められる。また、1年間で全員が2回のプレゼンテーションを達成したこと自体に発信力の向上が確認できる。今後の課題としては、春学期開始時のスピーキング力の検証とその初期値の設定である。その時点から1年間のスピーキング力の伸びを検証することで、スピーキングアクティビティーのより明確な効果を探っていきたい。

注

1. Krashen, S. *The Input Hypothesis: Issues and Implications*, Longman, 1985.

2. Swain, M. Communicative competence: some roles of comprehensible input and commprehensible output in its development. In S. Gass and C. Madden (Eds.), *Input in Second Language Acquisition*, pp.235-253, Newberry House, 1985.

参考文献

Susan M. Grass, Larry Selinker, *Second Language Acquisition*, Third Edition Routledge, 2008.

Rosamond Mitchell, Florence Myles, *Second Language Learning Theories*, Second Edition, Hodder Education, 2004.

Willem J.M. *Speaking: From Intention to Articulation*, MIT Press, 1989.

Merrill Swain "The Output Hypothesis: Its History and its Future"
<http://www.celea.org.cn/2007/keynote/ppt/merrill%20swain.pdf>

Joan Saslow, Allen Ascher, *Top Notch Level 2*, Third Edition' Pearson, 2015.

文部科学省「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」2013
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afeldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf

文部科学省「今後の英語教育の改善・充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm

文部科学省「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afeldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf

Test and Score Data Summary for TOEFL iBT Tests January2014-December 2014 Test Data
<http://www.toefl.com.tw/iBT/pdf/2014%20TOEFL%20iBT%20data%20summary%20.pdf>